

学びの風便り

リーディングスクール通信62 R8.3.27(金)



発行：松本市教育委員会 教育研修センター



特集！学びの改革のあゆみ 鎌田中学校・事業の振り返り

鎌田中学校 「探究を教科へ 教科を探究へ」1年間のあゆみ

● 教科の壁が消えるとき、学びは「自分事」になる

「学校の勉強は、将来何の役に立つの？」これは、多くの生徒が抱く切実な問いであり、教育現場が長年向き合ってきた課題でもあります。教科ごとに分断された知識は、テストが終われば消えてしまう「他人事」になりがちです。しかし鎌田中学校では、学びの構造に焦点を当てた新しい挑戦を始めました。教育目標「自主自律」の具現化に向けた研究テーマが「探究を教科に 教科を探究に」です。単なる知識の習得を超え、全教科での学びが「自分たちが生きる世界を、よりよく変えていくためのツール」へと昇華させようとする一年間でした。

● 「教える人」から「共に迷い、支える伴走者」へ

学びのハンドルを生徒に返したとき、教師のあり方もまた大きく変化しました。鎌田中では教師自らを、主役である生徒たちを輝かせるための「黒子（くろこ）」と定義しています。

- Teaching と Coaching の使い分け： Teaching（知識を授ける時）と、Coaching（生徒の問いを引き出す時）を絶妙にコントロールし、探究の環境を整えます。
- 同僚性が生む組織文化： 若手のフットワークとベテランの経験が融合し、「未来に必要な授業とは何か」という正解のない問いに、職員自身が自ら一丸となって探究し、立ち向かっています。

研究主任のA先生は、教師自身が「探究者」であるべきだとメッセージを投げかけます。「言葉だけで生徒たちに『頑張れ』という前に、職員がまず、答えの無い問いに立ち向かう『探究』をしていくべき」と話します。「これからの時代に適した授業」とは何なのかを探究する教師の背中こそが、生徒にとって最高の教科書となっているのです。鎌田中学校では、これまでもたくさんの教科の壁を乗り越えた実践を積み重ねてきました。教科の壁が消えるからこそ、逆に生徒たちはその教科の面白さを感じられると鎌田中の先生方は語ります。



● “AI に頼る人”ではなく、“AI と共に創り出せる人”へ

研究主任は、教育現場がAIを敬遠している間に、生徒たちはどんどんAIへの「楽な頼り方」を学習していくことに強い危機感を抱いています。AIと共に創り出せる人を目指し、社会科では「東京一極集中か、地方多極分散か」という答えの無い問いを設定し、生徒たちが探究を進めました。その学びの近くには教師が設定した「対話・反論AI」があります。このAIは、生徒が見落としている視点や気付いていない観点を指摘し、考えを深めていける環境を整えます。自分の授業のねらいを理解したAIを導入することで、充実した対話による学習の深まりを実現しようとしています。

● 鎌田中の挑戦が問いかけるもの

「テストのために、受験のために学ぶ」という狭い学力観から抜け出し、鎌田中学校が創り出そうとしているのは、生徒が自らの人生を切り拓くための「生きる力」そのものです。

私たち教師が、今日から変えられる「視点」は何だろうか？ 鎌田中の挑戦は、私たち教師に対しても、「学び続けることの楽しさ」と「探究し続ける勇気」が必要ではないかと問い直しています。



変わり始めた学校の風景

リーディングスクールが生み出した学びのうねり

リーディングスクールの3年間のあゆみを振り返って

教育研修センター 大久保和彦

この3年間のリーディングスクールの取組を通して、市内の学校に確かな変化が生まれています。担当者として強く実感しているのは、「当たり前の風景」が変わってきたということです。3年前には一部の実践にとどまっていた姿が、今では多くの学校で日常の光景となりつつあります。

例えば、子どもたちが自分たちで考え、話し合いながら運動会や音楽会、学習発表会などの行事を作り上げる姿。単元内自由進度学習や探究的な学びに、学校全体で取り組む学校の姿。対話と気づきを基盤に、先生たちが主体的に参画する校内研修や校内研究の姿。子どもも教師も、自らの学びを豊かに表現し、発信していくアウトプットの姿…



このようなかつての「先進的な実践」は、今、「各校で見られる日常」へと変わりつつあります。そして、こうした動きは、個々の学校の取組を超え、市全体としての「学びのうねり」を生み出しつつあります。

各実践校が実感している「3つの変容」

年度末に各実践校から、「取組の振り返り」を提供いただきました。それを読ませていただくと、どの学校も以下のような「3つの変容」を成果として実感していることが伝わってきました。

1 教師の変容 一課題意識から始まる対話とビジョンの共有一

各校では、自己課題の設定や授業公開、対話を軸とした研修を通して、教員一人ひとりが自らの教育観を問い直してきました。ある先生は、「生徒や仲間を求める前に、まずは自分自身が変わっていかないと決意した」と振り返っています。また、意図的に位置付けられた対話の機会を通じて「それいいね」という共感から「自分ならこうする」と実践を自分事として語り合う関係性が生まれ、対話の質が高まってきました。こうした積み重ねが、学校としてのビジョンの共有を確かなものにしてきました。

2 子どもの変容 一学びの当事者としての主体性と表現力の高まり一

先生の意識と実践の変化は、子どもの学びの姿に直結しています。各校において、様々な形で「自ら学びに向かう」子どもの姿が見られるようになりました。「主体的に取り組むことができた」「またこの学び方で学びたい」など、子どもが学びの当事者としての自覚を持ち始めていることを先生たちは実感されています。また、対話を通して他者の考えを取り入れ、自らの考えを再構築する協働的な学びも日常化してきました。「思い切って子どもに任せたら、予想以上の主体性、思考力、表現力が発揮された」と多くの先生たちが振り返られます。

3 学校文化の変容 一変化を恐れず、挑戦を歓迎する風土へ一

教員同士が授業や子どもの姿について語り合う職員室の情景が日常化し、挑戦を歓迎する雰囲気が学校に広がっています。「やってみたらどんなよいことが生まれるかを考えると可能性が見えてきた」という声に見られるように、変化を前向きに捉える文化が育まれています。

これらの取組に共通しているのは、特別な手法ではなく、

対話と内省（リフレクション）を大切にすること

全員が参画する仕組みをつくること

子どもに学びを委ねること といった、教育の本質に立ち返る実践であるという点です。



そして、学校改革は特別な取組によって実現するのではなく、日々の対話と実践の積み重ねによって生まれるということ、各校の実践は教えてくれます。

「みんミラ」で一層大きなうねりに

以上のようなリーディングスクールの取組は、各校の挑戦の積み重ねによって、市全体の学びを変える大きな力となり始めています。次年度から「みんミラ」がスタートします。リーディングスクールの挑戦に学びながら、このうねりを一層大きなものにしていきたいと思えます。「子どもが主人公」の学校づくりを、みんなで進めましょう！